

A Constractive Analysis of Adverb'almodification between Chinese and Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/799

中国語状語中心語統合型と日本語連用修飾統合型 —— 形容詞分類を中心とする比較対照

大 滝 幸 子

1 はじめに

筆者は先に拙稿 2000¹⁾ において、形容詞(A)を用いて動詞(V)を修飾する統合型として中国語の3種類の統合型をとりあげ、日本語の連用修飾統合型と比較対照するために、2つの研究課題を設定した。本稿は、この2つの研究課題をさらに深く追求するために、以下の課題を設定する。

【課題Ⅰ】中国語の状語中心語統合型については形容詞に構造助詞“地”がついたタイプ(以下、CACV型と略称する)に限定する。日本語の連用修飾統合型については、形容詞・形容動詞の連用形および<～している形>状態動詞の語幹(または語幹に助詞「と」が結合した形式)を連用修飾語とするタイプ(以下、JAJV型と略称する)にしぼる。そのうえで日中両国語の形容詞論・動詞論を踏まえ、CACV型内とJAJV型内での形容詞形式と動詞形式の共起制限のあり方を比較対照することによって、その統合意義特徴の異同を明らかにする。

【課題Ⅱ】CACV型とJAJV型が成立するにあたり、あるものは文脈(前後の文からの言語表現またはそれに変わる発話場面の状況)からの文脈意義の補充を必要とする。どのような文脈意義の補充がどの程度まで必要かという分析を通して、日中両国語のテキスト構造(後述)の異同について考察する。

2 本研究にもちいる基礎的概念

【課題Ⅱ】の規定に関しては、これまで筆者が用いてきた文法概念のほかに、いくつか

の概念を補充する必要がある。

拙稿2001²では、具体例の解説において用例中の統合型への〈文脈意義からの補充〉のあり方を述べた。本稿では、文脈意義に支えられることによって初めて成立する統合型と、文脈意義の補充を必要とせず単独に成立する統合型との、語義的文法的違いを精確に論じるため、文脈意義に以下の2種類の区別をつける。

- (1) その統合型が成立するための必要条件となる文脈意義を、「統合必須文脈意義」と呼ぶことにする(具体例は文末脚注3参照³)。統合必須文脈意義の補充によって成立した統合型の統合意義には、〈補充された統合必須文脈意義と同一の文脈意義を表示して、すなわち統合促進義をその内部にとりこんで、後続の文に伝える文法機能〉が備わると考える必要がある。
- (2) 多義を生じうる統合意義を、その文中においてくどれか一つの意義に確定できる文脈意義〈すなわち統合意義確定のための条件となる文脈意義を、「多義選定文脈意義」と呼ぶことにする(具体例は文末脚注4参照⁴)。多義選定文脈意義は、統合型が表す統合意義に対して影響を与えるばかりでなく、多義を生じうる形式・意義であれば、単語・意義素から複合統合型・複合統合意義、最大統合型・叙述内容とも、意義呼応関係を結ぶ。

また、さらに本稿では、文脈意義を形成する言語形式の存在位置についても、収集資料の整理にあたって、次の2種類を区別する。一部、術語の定義を拙稿2001よりも詳しく定める(アンダーラインの部分)

- (1) 「同一陳述の文」すなわち当該統合型が属している文と同一の文(単句文或いは複句文⁵)の中に含まれている場合、この位置のことを同一文内と呼ぶ。
- (2) 「同一話題⁶のテキスト」すなわち当該統合型が属している文の属している「複数の文がひとまとまりの連文としてコミュニケーションを成立させているテキスト」と同一のテキストの中に含まれている場合、この存在位置のことを同一テキスト内と呼ぶ。

このように言語資料を区別して扱うことは、文単位の文法および意味分析と、テキスト単位の文法および意味分析との相互関係を見出すために必要とされる第一段階の措置である。異同が明らかにされていない概念を適確に関連付けることはできない。

そこで、上記(1)の文脈分析をおこなうために、これまで筆者が用いてきた「文の意味」の構成要素を再録し、本稿の「テキストの意味」との比較に供しておく。

① 叙述内容

- ② 「一つの状況」すなわち「一つの叙述時点(叙述地点はその下位にあり、複数の場合もありうる)をもつ叙述内容の背景」についての詳述
- ③ 一つの結句陳述(話し手の発話時点での叙述内容・状況に対する見解(=述定):話し手の発話時点での聞き手への働きかけ(=伝達))

次に、上記(2)のテキスト分析を行うために、本稿での「テキストの意味」の構成要素についての仮説の概略をしめしておく。詳しくは稿を改めて論じることにする。

- ① 連文をまとめて区切る契機は「同一の話題の完了」である。話題の完了は、話し手が一人の場合と、複数存在する場合とでその必要要件を異にする。
前者では「話題への<述べ尽くし⁷>と<段落陳述⁸>」であり、後者では「話し手と聞き手が相互の立場を入れ替えながら述べ尽くしをはかる<共同叙述>」の結果としての、「話題への<共通認識の成立>」である。
- ② テキストを単位とする文法においては、状況は文の数だけ存在し、成員となる文の叙述類型にも一貫性があるとは限らない。話し手はおのこの状況および叙述類型を事実レベルまたは論理レベルで相互に関係づけ、話題への段落陳述または共通認識の成立に向けて述べ尽くしを図る。
- ③ 話題は述べ尽くされるべき関心事であり、その関心のありかたそのもの、または関心事についての情報が、共同叙述のなかに差し込まれることがある(<描きこみ>)。

また、本稿で状語成分の統合意義を考察するにあたって、たびたび用いることになる「詳述の営み」「詳述する」という筆者の仮定による文法機能と、学会で通常用いられてきた「叙述の営み」「叙述する」という文法機能を比較して、その違いを再度確認しておく。両者はともに陳述(文の言い切り)とは直接関わらず、表現者(同一話題についての叙述内容を完成する人格)の視点にたった認識・判断・表現行為であるが、以下の点で差異があるものとして設定してある。

叙述の営みは、主に次の二つの機能を果たす。(1)2項構成の統合型において、用言(動詞・形容詞)の意義素内に規定された格を、体言(名詞句など)や下位統合型が補填する関係を成立させる。(2)単一の述語を構成する、用言と用言、または用言と付属語の2項構成による形式を成立させる。また、(1)(2)はそれぞれ、叙述時点・叙述地点と関わ

りをもつ事実叙述と、時空に関する制約をもたない論理叙述のどちらか一方の特徴をもつ叙述として述べられる。

一方、詳述の営みにも、事実と論理との区別に呼応する区別が存在する。また、叙述の営みによって述語の現象素として指示されている「状況内の状態・変化・行為」に対し、俯瞰する視点から描きこむための形式(詳述形式)であるため、その統合型は原則として隣接した2つの言語形式を成員とする<隣接2項による内部構成>をとることはない。必ず何らかの上位統合型となる。

詳述として描きこまれる内容は、主に次の3点である。(1)単一の状況を俯瞰する視点から表現者が立場表明や価値評価などを描きこむ。(2)複数の状況を対比して、各々の出来事の間にはどういう事実関係が生じているのか、その事実関係から更にどういう論理関係が抽出されるのかを描きこむ。(3)事実叙述と論理叙述のバランスをとって、テキストの話題への描きこみを完成して述べ尽くし、そのうえで結句陳述を誘導する。本稿でとりあげる詳述は(1)のタイプである。

3 本稿での言語資料収集方法

さて、本稿では状語中心語統合型 CACV 型の形式が成立するために必要と考えられる3つの呼応条件、すなわち(1)形容詞と動詞の語義的呼応(2)統合型の統合意義特徴と、その統合型の成分になる形式の意義との呼応(3)文脈意義との呼応、について考察を加えるために、次の方法で言語資料を収集した。

ただし、これらの言語資料は厳格な意味での統計的価値を考慮するならば、「予備調査」または「用例検討サンプル」としての位置付けしか得られない。しかし、言語構造の分析、特に文法解析においては、『文法的な文と非文との類別に、現実の発話における使用頻度の統計的確率がまったく無関係であること』⁹⁾ は、公認されうる事実である。したがって本稿では、CACV型の統合意義特徴を考察するにあたり、演繹法則的説明を容易に行えるように分析手順を設定した。すなわち、まず形容詞と動詞を仮説をもとに分類し、その種別ごとに共起制限のあり方を具体的事実のなかから検証していくことにした。

3-1: 検索資料 A

検索ソフト¹⁰を用いて、当代の流行作家11名の作品145篇に対して、CACV型内で用いられる形容詞の用例を検索した。検索対象として形容詞は“清楚シソーラス”の成員(“清楚”“明白”“明确”“模糊”“糊涂”)5個と、拙稿2000でとりあげた形容詞(すなわち、VA型の補語成分になれるもの)のなかで<形容詞+“地”>の検索で用例が見つかったもの総数32個である。かつまた、当該統合型を含んだ文の前後5行づつを検索範囲に含めることによって、文脈意義特徴を見落とさないように配慮した。ただし、この検索資料Aは次の2点で不完全である。(1)組合わせられる動詞グループに属するすべての動詞をチェックしたものではないこと。(2)他の動詞との組み合わせが可能であるかどうかは、インフォーマントの内省によって想起されたものに限ること。

しかしながら、CACV型の統合意義特徴について、これまで見出した4種類の統合意義特徴の規定を補充、訂正するためには一定の効果をあげうるものと予想できる。

検索の結果、収集できた用例数は以下のとおりである。

【清楚シソーラス】()内は組み合わせる動詞の異なり数

清楚	24 (8)	清清楚楚	3 (2)		
明白	2 (2)	明明白白	1 (1)	明确	11 (7)
模糊	7 (6)	模模糊糊	2 (2)	糊涂	3 (3)
				糊里糊涂	2 (2)

【CP1(計量形容詞):CP2(性質形容詞):CG(感覚感情形容詞)】

CP1	很快地	7	慢慢地	103	高高地	4	大大地	2	小小地	1
	很早就	4	远远地	5	轻轻地	6				
CP2	简单地	6	具体地	1	详细地	7	公平地	1	复杂地	1
	周到地	1	漂亮地	4	端正地	4				
CG	高兴地	5	高高兴兴地	2			痛快地	6	痛痛快地	3
	聪明地	4	灰心地	1	厌烦地	7				

3-2: 検索資料 V

検索資料Aを作成するのに用いた作品群に対して、拙稿2001で扱った清楚シソーラ

スの形容詞と組み合わせる10種類、30個の動詞の用例検索をかけた。また、拙稿 2000 で考察対象とした15種類の動詞(総数56個、うち多義語6個を含む)のうち、拙稿 2001 の10種類の動詞分類(①～⑩)と共通する単語を10種類にふりわけなおすとともに、清楚シソーラスの形容詞とは VA 型内で組み合わせられない動詞の類を整理して別類(11～26)をたてた。検索の結果、A 地 V 型の用例として収集できた用例数は以下のとおりである。(数字のない単語は検索用例なし)

- 【①思考動詞Ⅰ】 认识》3：了解》2：知道》6：记》6
- 【②思考動詞Ⅱ】 分》4：解释》9：
- 【③思考動詞Ⅲ】 想》69 (16 能願動詞)：看》430
- 【④知覚動詞】 看》43：听》47
- 【⑤言語行為動詞Ⅰ】 (情報の移動) 问》234：打听》2
- 【⑥言語行為動詞Ⅱ】 (思考生産物) 说》910：谈》12：表明》表达》7
- 【⑦調査行為動詞】 查》3：算》点》数》2
- 【⑧形状変質動詞】 洗》10：印》2：抄》
- 【⑨表現行為動詞】 画》3：唱》11：写》10：标》放(声)》4
- 【⑩行為代動詞】 弄》4：摸》12：闹》搞》
- [11 姿態動詞] 坐》138：站》146 点》44
- [12 継続自立動詞] 睡》22：玩》8：走》335 穿》11
- [13 瞬間自立動詞 (消失出現)] 来》6 (22)：去》6 (64) 下(车)》6
- [14 感情起因動詞] 哭》69：笑》89
- [15 感覚動詞] 累》吓》
- [16 獲得所有動詞] 买》2：穿》13：吃》31
- [17 物体運搬動詞 (付着)] 挂》11：摆》6：贴》17：装》放》
在》10
- [18 物体移動動詞 (移動)] 放(到)》4：搬》1
- [19 摩擦動詞] 擦》10：磨》5：洗(澡)》8
- [20 形状変化動詞] 切》2：裁》剪》放》1：磨》
- [21 性質変質動詞] 熬》煮》炒》
- [22 道具使用動詞] 浇》1：捆》1：盖》1 捂》2

- [23 物体生産動詞] 织》 挖》 2 : 盖》
[24 当体変化動詞] 冻》 生》 3 : 长》 3 (长大 4)
[25 自然変化動詞] 下 (雨) 》 4 : 流》 13 吹》
[26 当体自立動詞] 烧》 2

以上の検索資料Aと検索資料Vは、今後、単語数、用例数ともに補足し続けていく予定である。

3-3 : インフォーマント調査と動詞述語類型の設定

本稿では上記3種類の検索資料について、インフォーマント(李炜东 : 36 歳 (男) 浙江省生 : 北京在住 20 年)を依頼して、以下の調査を行った。

(1) 例文中の状語の位置にある形容詞が A 地(計量形容詞・性質形容詞原形)很 A 地(評価形容詞形), AA 地(描写形容詞形)の3種類全ての形式(以下、A, 很 A, AA 的の形式を「CA 3 形式」と呼ぶ)で、使えるかどうか。

(2) 例文中の述語となった動詞と VA 型:V 得 A 型の統合型を作れるかどうか。

(3) 例文中の主語に対し、例文中で状語となっている形式が述語として使えるかどうか。

また、動詞述語形式(動詞と後続付属形式)として3種類をとりあげ、さらに、A 地 V 型の上位統合型3種類:CV 単独・賓語を加える「CVCO」・介詞“把”を加える「把OCV」をとりあげ、どの統合型で用いられるか、についても、インフォーマントに内省報告を求めた。ただし、これらの調査項目全てについて全ての収集用例を調査すると調査量が膨大になるため、後日被験者の数を増やし、調査結果の正確を期したい。

4 形容詞・状語成分からの検討

本稿で状語の位置にくる形容詞の詳述の営みを分析するにあたり、形容詞を大きく2大別した。一つのグループは判断形容詞・評価形容詞・描写形容詞をとりあげ、もう一つのグループとして感覚感情形容詞と人間を形容する形容詞をとりあげた。両者の最も大きな詳述の営みの違いは、状況に対する視点の置き方にあると考える。その視点の差異は、従来の先行研究および筆者の分析によれば以下のように概括できる。

【状語の位置での判断形容詞(評価形容詞)CP1・描写形容詞CP2】

- ① 単一の状況でおこる出来事内の過程、状態を、述語のさまざまな格補填語の指示対象について、その現象素をクローズアップして描きこむ。¹¹
- ② 文中の動作主(有意思者)がある出来事を導いたことに対する「表現者の視点にたった評価」を描きこむ。¹²

【状語の位置での感覚感情形容詞CG・人間を形容する形容詞CP1】

単一の状況におきた出来事・変化と並行して生じる、動作主(または経験者)の心身の状態を描きこむ。

本項ではこれらのCA成分の分析について、その妥当性すなわち言語事実の説明能力を検討するとともに、新しい分析結果を求めて検索資料の検討を進める。

4-1: 人間を形容する形容詞の状語としての文法的意義特徴

—— “糊塗”を例として ——

清楚シソーラス資料の“糊里糊塗”の用例に、論理仮定に用いられた用例がある。

[糊塗①] 我认真对安佳说;

“糊里糊塗地动笔，费劲不说，一不留神搞成文学那才后悔不及。”

(王朔《一点正经没有》)

[ぼんやり①] 私はアンジャに向かって真剣にこう言った:「ぼんやりしたままで書いていると手間取ってしまうのはもちろんのこと、うかつに作品をしあげてしまっからでは後悔してもおそいわよ。」

cf. CA“糊塗”の語義の現象素は、JAとしては心理状態動詞「ぼんやりする→ぼんやりしている」の語義の現象素と相似するものとする。

まず、シソーラス内における意義素の検討は拙稿¹³ ですませたものとして、

「人間を形容する」語義分野においての、日本語との比較対照を行う。

“糊里糊塗”は人間を形容する形容詞“糊塗”の描写形容詞形である。“糊塗”は、感覚感情形容詞を文法的に規定する文型<我觉得～: 感到>において、その発話場面での発話者の感覚感情を表現することがない。<他很糊塗>が、もつともBASEな用法として意識される文例である。また、<我很糊塗>が一見単独で成立しても、その叙述内容には

「あの時の私は」「こんなことをしてしまった私は」という統合必須文脈意義が含まれ、語義の規定として＜経験者の臨場感覚を表示する＞感覚感情形容詞とは認められない。すなわち、この文脈意義は「その判断が下される状況に対して発話時点以外の叙述時点を設定することによって、“我”を話し手から切り離し、客観的な判断対象化する」ものである。したがって、この“糊涂”は“我”によって経験者格(感覚を生じさせた当事者)を補填するのではなく、「判断対象としての人間」(判断対象格)の精神状態を判断する語義を表示する。こういう語義によって人間を形容する単語が、中国語の品詞体系の中では一般の判断形容詞と同一の文法的振る舞いを一貫してしめすことを、以下の用例分析で明らかにしていく。

一方、日本語の品詞体系では、“清楚”“糊涂”などに対応する現象素は多く「～している」形をBASE形(連体・終止)とする心理状態動詞によって表示され、活用形も動詞と同一の振る舞いをしめす。中国語と日本語のあいだで、相似した現象素を有しながら、品詞分類を異にする語義分野といえる。

さて、[糊涂①]内の“糊里糊涂”は“糊涂”と置き換えるには違和感があり、“很糊涂”との置き換えはまず不可能と報告された。この状語としての“糊里糊涂”が描写対象格としている言語形式は述語“动笔”の主語であり、動詞“动笔”の動作主格を潜在的に補填する「論理仮定句内の＜不定動作主＞」であると解釈できる。“糊里糊涂地”は不定動作主が“动笔”という動作を行うさいに「動作行為と平行して抱く精神状態」を描きこんでいると考えられる。それに対して、“很糊涂”は副詞“很”によって明らかに貶義と判断を定められた評価形容詞形であるため、その評価対象として不定動作主しかも論理仮定句内にあって＜何ら具体的行為をなしおえてはいない存在＞である人間をとりあげることは、論理叙述としても事実叙述としても破綻をきたすと考えられる。

この解釈を裏付けるために、“很糊涂地”と“动笔”とが同一単文内に共起する例についても、なぜ共起できるかについてここで考察しておく。

[糊涂②] 他很糊涂地动笔写下了这篇文章。

[おろか①] 彼はおろかにもペンをとってこんな文章を書き残し(てしまった)た。

同一文内にどのような統合必須文脈意義が存在するかを分析すると、(1)動作主がある具体的行為を完了していること(2)動作主がその行為を完了したという事実に対して、人間を形容する形容詞の評価形容詞形を用いて評価(批評)を下すこと。の2点が見出さ

れる。したがってこういう状語は、陳述の中の＜述定＞すなわち「叙述内容・状況に対する話し手の見解」と呼応しうる表現者(同一話題を持つ叙述内容を完成する)の見解を、状語の位置にはさみこんで詳述した形式とみなすことができる。

日本語の文法構造においても、渡辺 1974¹⁴では従来連用修飾成分として一括されてきた表現の内部に異なる文法的機能の存在を認め、それを「連用の機能」と「誘導の機能」として規定している。本稿では、中国語の状語成分としての“糊里糊涂地”は前者の機能を、“很糊涂地”は後者の機能を担う形式に相似するものとして、その現象素をとらえるのが妥当な翻訳セオリー、すなわち中国語を日本語へ訳す場合に適応されるべき「日本語体系内の文法的意義特徴」であると考え。以下、誘導の機能についての解説を一部引用する。

『これら、態度の誘導副詞(陳述副詞:決して、もし、きっと)注釈の誘導副詞(もちろん、事実、あいにく)批評の誘導形(連用形:確かに、珍しく、明らかに)を通して、それらが話し手の立場から発せられるもので、事柄という対象世界の描写のために発せられるものでないことは、注意をしてよい。対象の描写も、要するに話し手がするのであるが、それはあくまで対象世界のことと捉えて叙述するのだが、誘導に属するものは話し手自身の立場の現れでしかない。これらが叙述内容の含量に増減の影響を及ぼさなかったのは当然というべきであろう。』p139 ()内の例は筆者が本文の例文よりとりだしたもの

ただし、ここで中国語体系内の文法的意義特徴として見落とせない特徴があることを忘れてはならない。すなわち、中国語“很糊涂地”が状語成分として用いられる場合は、統合必須意義の存在が認められることである。“很糊涂”が状語成分として用いられる場合には、例えば“他动笔写了这篇文章。”のような「過去の出来事としての現実」のみを評価対象としてとらねばならない¹⁵のである。

しかも、この統合必須意義は“很糊涂”を述語として用いる場合(例えば[糊涂③])には不必要である。つまり、述語成分としての“很糊涂”は、「確定」していさえすれば「論理叙述すなわち叙述時点を超越している叙述」をも、主部(評価対象)としてとれるようになる。
[糊涂③] 他一定要写这样的故事，很糊涂！

?? 他很糊涂地一定要写这样的故事！

[おろか②] 彼は何が何でもこんな物語を書こうとする、まったくおろかだ。

この用例内の主部“他一定要写这样的故事”は、「まだ現実(過去の出来事)にはなっていないが、精神状態としては成立済みであり、その結果変動要素が消滅した論理叙述(叙述時点を含まない叙述類:叙述時点を含む事実叙述と相対する)が成立していると捉えられる。

このように“很糊涂”が話し手の真偽判定としての陳述を担う述語成分に用いられれば、【確定した論理叙述】に対する話し手の評価を表せるにもかかわらず、状語成分として述部に挿入された場合には、表現者の下した評価として論理叙述に対する評価を詳述できなくなることは、状語成分として用いられるときには統合必須文脈意義が存在することと表裏一体である。

そこで、その統合必須文脈意義を、CACV型に属する統合意義特徴の一つとして規定する。

【A 地 V 型統合意義特徴 V】

評価形容詞が状語となる場合 : 原形または評価形容詞形(帰属スケールを固定する程度副詞“很”などを附加した形式)を用いて、過去の出来事としての現実を表す叙述内容に対して、表現者の褒貶に関する評価を詳述する。

4-2 : 感覚感情形容詞の状語としての文法的意義特徴

—— “痛快” を例として ——

本項では、感覚感情形容詞と人間を形容する形容詞との語義的意義特徴をともに有する多義語“痛快”を、拙稿 1996¹⁶ で行った用法とあわせて検討し、状語成分としての統合意義特徴に関して新しい知見を求めていく。

[痛快①]我不喜欢他们当面一套背后一套，要骂就对着我痛痛快快地骂，我听得进意见。
(苏童《肉联厂的春天》)

[思う存分①]私はあの人たちが面と向かってと影とでは手口の違うのが嫌なんだ。非難したいなら私を思う存分非難すればいい、聞いてあげるよ。

[痛快②]这坚决想不通，我得点好儿都不能痛痛快快地得，我也太惨了！

(王朔《我是你爸爸》)

[すんなり①]これは何としても納得できないの、私はすんなりとちょっといい目見ることさ

えできないし、私だって惨めなものよ。

[痛快①][痛快②]はともに描写形容詞形をとるが、その文脈で表している語義は感覚感情形容詞の原形“痛快”が表す語義、すなわち＜我觉得～：感到～＞の文型のなかでの語義とは異なっている。また描写形容詞形“痛痛快快的”は様態補語や状語成分としては用いられても、主語に人間を表す形式をとって「経験者格の感情を表したり、その人間の動作行為を原因¹⁷として(第一人称者に)生じた感覚をあらわすことができない。そこで、この描写形容詞形が状語成分として(その現象素をクローズアップして描きこんでいる)描写対象とするのは、その連用修飾するところの述語動詞の動作行為の経過に平行して、どのような感情や感覚を生じているか、という、「動作行為の経過への描きこみ」であると考えられる。この解釈は、感覚感情形容詞重畳形が状語成分となった場合の【A 地 V 型統合意義特徴Ⅱ】¹⁸ から導かれる。

[痛快①]と[痛快②]をさらに比較してみると、双方とも、述語があらわす行為は事実となっていない、すなわち具体的な叙述時点を指定できない「出来事概念」として留まっている。前者は事実仮定複句文の仮定結句のなかにあり、後者は述部全体として不可能な出来事と判断されている。したがってその行為を描きこんだ“痛痛快快地”は、出来事経過の一般的なありかた、すなわち「十分にやり尽くして感情的満足を生じている」、「順調にすっきりと結果がでて快感を生じている」を示すに留まり、ある特定の状況内での具体的な精神状態を表すのでもなく、なんらかの行為と因果関係があると示しているわけではない。

次に二つの用例の違いについて考察する。[痛快①]では描写形容詞形“痛痛快快”は、評価形容詞形“很痛快”と置き換えられないが、[痛快②]では置き換えられる。二つの言語形式が置き換えられるという言語事実は、語義についての変化は当然存在しているものの、その二つの言語形式が文法的意義特徴のうえでは相互に共通の特徴を有し、少なくとも共起制限を生じるような意義特徴を含んでいないことを示している。置き換えられない場合は、語義的な共起制限が生じている場合と、文法的な共起制限が生じた場合と二通りの可能性が存在する。

そこでまず、[痛快①]の状語成分の位置で評価形容詞形“很痛快”が使えなくなる原因を考察する。＜他很痛快＞での“很痛快”の語義は、第一に「彼は感じのいいやつだ。」という人間の態度や気性から快感をうけた、という快感を示すもの¹⁹であり、(連帯修飾では

“痛快人”(テキパキした好感のもてる人物)など)、この場合の主語の位置にある形式は、「感覚を与える原因格」を補填する。この語義を<“痛快”の感覚形容詞としての語義>とする。このような感覚は、どれほど心地よいものであっても、評価形容詞が有する「褒貶義」と即、同一の意義特徴とみなすのは避けるべきである。感覚感情形容詞と評価形容詞とでは、文法的振る舞いの異なる率が高いからである。また、<他很痛快>の統合意義が「彼は思いが晴れて喜んでいる」を表すためには、多義選定文脈意義が必要であり、マーク付きの意義となる。

一方、それに対して、<我很痛快>では、主語“我”が「経験者格」を補填した語義である<“痛快”の感情形容詞としての語義>、すなわち思いが晴れて満足を感じる感情の方が第一に想起され、ノーマークの語義として扱われることになる。この述語成分としての二つの語義の違いを考慮にいれつつ、以下の考察を進めていく。

[痛快①]では、潜在的主語位置におかれているのが“他们”であり、状語の位置に“很痛快”が置かれた場合でも、通常それをまず原因格として、感覚形容詞としての「彼らからつよい快感を受けた」という語義を想起する。しかしそれは、叙述内容全体と比べてみると大変矛盾した語義である。また“骂我”という出来事を原因格ととらえてみてもやはり“我”の感覚が“痛快”であるという可能性は、背景としてよほどのマゾ精神でもない限り、ゼロに等しい。したがって、[痛快①]は語義的共起制限が生じているために、“很痛快”が状語成分になれなくなると解釈できる。

一方、[痛快②]の用例の状語成分を“很痛快地”に置き換えた場合、“我得点好儿都不能很痛快地得”という叙述内容は多少特殊な可能判断とは感じられるものの、許容範囲の表現とみなされる。まず、副詞“都”によって“我得点好儿”(自分がちょっとはいい目を見る)という事柄が主部として指定される。こういう出来事は通常行為者に快感をもたらすことであり、感情的な満足を生じさせるので、感情形容詞としての語義も想起されやすくなるが、叙述内容の構造を分析していくと、むしろ感覚形容詞としての語義が用いられていることが判明していく。

まず、述部内の動詞“得”は、この単文内で主部の“得点好儿”の代用形式²⁰として<単文成立の要件を整えるため>述語に割り振られた形式とみなすことができる。そうすると、状語“很痛快”は主部の事柄に対して、“不能”という論理判断をくだした述語(能願動詞)が要求している賓語(動詞フレーズ“很痛快地得”:意義素内の意味項目の一つ、「判

断基準」を表す)のなかにあつて、動詞“得”で代用された事柄(すなわち主部として「判断対象格」を担っている事柄)に対して詳述を加えていることになる。言い換えるならば、判断対象となる出来事(“我得点好儿”)への判断結果(“不能”)を導く判断基準は、判断対象そのものと同じであるはずはないので、ここに詳述された状語(“很痛快”)が(1)その原因格を求める述語としての文法的意義特徴を有するようになる。(2) 主部と述部の関連づけ <(1) 主述統合型の統合意義特徴が主部・述部の叙述と共起できること (2) 主部・述部の現象素が一つの現象素枠内に連結されて、一つの状況を指示できること²¹>が可能かどうかを、判断するための判断基準として、焦点化される。(意義素内の意味的事項の一つ「判断方法」は、“能”の語義的意義特徴によって決定される²²)。ここでの焦点化とは、新情報として表現される重要度が最も高くなることを指す。そうすると、この判断基準とは、“痛快”が求める「原因格」を“我得点好儿”がみたせるかどうか、という基準になり、判断方法のメカニズムとしては「原因格を補填した形式“我得点好儿”の現象素によって、感覚“痛快”が引き起こされる、という論理的判断を下す方法」(状語を基準にすえた判断であるので、状況を俯瞰する視点から下される判断)となる。判断結果の出し方は<肯定否定という二者択一(“能不能”)>であり、この文で出された判断結果は<不可能“不能”>である。日本語の相応訳としては、「ちょっといい目を見ることさえ、気分よくはできない」などが適当であろう。

上記のごとく、叙述内容の構造²³を把握したところで、[痛快②]の元の用例、状語が“痛痛快快地”となった用例の解釈についてあらためて検討する。状語“痛痛快快地”は“很痛快地”が状況全体に対して時間性を排除した<判定(叙述類型)の視点からの詳述>を行うのとは異なり、述語“得(点好)”の現象素に対して、「順調にとどこおりなく」という経過を経たという<流相の状態(述語類型)>を詳述していると考えられる。そうすると、その叙述内容の構造の記述としては、能願動詞“能”の判断基準は“痛痛快快地得”という能願動詞の賓語全体が叙述している<事実認定>ということになる。すなわち、“很痛快”は述語の“得”(判断対象と同一内容を指す代用形式)から分離して詳述の営みを行うと認められるのに対して、“痛痛快快地”は述語と融合して一つの判断基準となると考えるべきである。さきに挙げてある訳例「すんなりとちょっといい目を見ることさえできない」は、この中国語の構造にできるだけ類似した現象素を指示している日本語を探したものである。なお、このような状語になる形容詞 CP 形式の違いによって生じた叙述構造の違い

は、インフォーマントの「“很痛快地”には評価意識が強くでる」という語感報告にも反映しているとみなせよう。

続いて状語として原形“痛快”を用いた二つの用例が、ともに“痛痛快地”には置き換えられるものの、“一方([痛快③])は“很痛快”に置き換えられ、一方[痛快④]は“很痛快”に置き換えられない、その原因を検討する。

[痛快③] 后来，他请假说想出去玩玩。父亲竟挥挥手痛快地同意了。

(王朔《我是你爸爸》)

[躊躇無く①]その後、彼が休暇をとって遊びに行きたいと言ったところ、父はなんと、行け、行けと(手まねまでして)なんのためらいもなく承知したのだ。

[痛快④] 我吓昏了，从此一直期待着您能抱抱我，给我壮壮胆，让我与您一块痛快地哭哭父亲，可您误解了。

(池莉《你是一条河》)

[躊躇無く②]私はすっかり動転し、それからというもの貴方が私を抱きしめてくれないか、力づけてくれないか、そして貴方と一緒に父を偲んで誰憚ることなく(思い切り)泣かせてくれないかと、待っていたのです、でも貴方は誤解なされた。

[痛快③]も[痛快④]も“痛痛快地”に置き換えることができ、その場合の意味変化はそれぞれの語義に微妙な差異が生じるものの、通常自覚される語感としては「表す程度が多少強くなる」くらいの語感に留まるという。

まず、[痛快③]で状語を“痛痛快地”に置き換えた場合、感情的な語義ではなく感覚的な語義(「何の躊躇も感じられない、スッキリ即決した感じを受ける」)がまず想起される。叙述内容の構造としては、“同意”する行為に伴う(またはその経過が原因として生じる)明快な印象を描きこんでいると解釈できる。“很痛快地”を状語成分にした場合には、同意したという現実化した行為が与えた「スッキリした印象がもたらす快感」がはっきり表現されるようになる。

それに対して[痛快④]では、“痛痛快地”に置き換えた場合、感情的語義である「思い切りやって気分が晴れる」という感情が“哭哭”(ちょっと泣いてみる)という試行行為に伴ってくる。この用例では、泣いている動作者と“痛快”という精神状態を生じている経験者、そして第一人称者“我”と表現者が同一人格に兼ねられているため、他の語義解釈は成立しなくなる。しかし、この状語成分を“很痛快地”に置き換えることはできない。

この共起制限が生じる原因は、文法レベルに存在していると考えられる。その理由は

二つある。

(1)まず、“哭”と“痛快”はVA型において共起できるのでBASEとなる語義レベルで共起制限が生じていないものと考えられる。“哭痛快了”は「思いっきり泣いた」という統合意義を表し、“痛快”は「(長時間にわたって、または激しく同一行為を行うことで)思いが晴れた」という感情形容詞としての語義を表している。さらにまた、

A地V型でも“很痛快地哭开了／哭了一阵”(なに憚らずワット泣き出した／思いっきりワアワア泣いた)という統合は成立することから、“痛快”と“哭”のあいだに決定的な語義的共起制限のないことがわかるからである。(2)状語成分としてはCP 3形式のうち、副詞“很”を付加した評価形容詞形のみが用いることが出来ない。そこで、副詞“很”の意義素がA地V型の統合意義特徴と共起制限を生じていると推定できる。筆者の分析によれば、副詞“很”は文法的意義特徴として「判断スケール・帰属スケールという程度をはかるスケールを固定する」²⁴を有する。感覚感情形容詞と統合される場合にも、同様の文法的意義特徴が呼応して機能すると推定するならば、その意義特徴が述語形式である試行を表す文法形式・重畳形“哭哭”と、共起制限を引き起こしていることになる。

そこで、副詞“很”の文法的意義特徴と、動作行為の試行という文法的意義特徴との共起制限が生じる原因を考察してみるならば、次の2点が容易に指摘できる。

(1)“哭”(泣く)という行為が現実になっていない。したがって、“痛快”という感情も(ある叙述時点で)事実として生じているという「出来事連鎖」成立の保証がない。(2)精神状態(感覚)が“很痛快”であるために“哭哭”(泣いてみる)という試行行為にいたるという、「因果関係(感情→行為)」を認める社会的通念は存在しえない。

これらの叙述の営みと、評価形容詞形(“很”+形容詞)を状語として成立する叙述の営み(A地V型統合意義特徴I)との差異を、日本語文法体系における連用修飾成分について見出された2種類の連用修飾のありかたと比較してみると、後者の叙述の営みが、仁田 1983²⁵ から日本語文法研究者によって指摘された<結果を表す副詞>と類似していることに気づかされる。

『動きの実現のされ方を表す副詞的修飾成分を、あり方の副詞と名付け、その下位類として、動きそのものに内属する側面の様子を述べることによって動きのあり方を示した様態の副詞(ユックリ、激シク、斜メニ、ビリッ)と、動きの結果の主体や対象の状態のあり様に言及することによって動きのあり方を示した結果の副詞(ボロボロニ、キレイニ、バラバラ

ニ、ガサガサニ)とを挙げた。』p135()内補充

『結果の副詞を取る他動詞は、主体の働き掛けが対象の状態を変化させる、といった意味的あり方を取るもの、特に典型的なのが様変えの対象変化の他動詞(染メル、磨ク、編ム、煮ル、破ル、切ル、壊ス、固メル)である。そして、自動詞では、主体の状態変動といった意味的あり方を取るもの、特に典型的なのが様変え(変ワル、破レル、切レル、壊レル、固マル)のそれである。』p134()内補充

しかし、中国語では日本語の上記のような他動詞と自動詞の語彙的な差異は、同一語形の動詞Vが、VA了N型またはNVA了型の統合意義特徴と共起して表す統合意義の差異として表現される。したがって、日本語の連用修飾統合型と中国語の状語中心語統合型との修飾成分で、両国語の形容詞がどのように用いられるか、特に結果をあらわす修飾語として理解される場合の用法がどのように異なるかを考察するにあたって、中国語では個々の形容詞の意義素だけでなく、その置かれた文法的位置(状語と述語)がになう文法的意義特徴があわさって形成された統合意義に、より注目する必要があると考えられる。

まず、原形“痛快”はVA型内の結果補語成分になることができ、そのことによって、その表示する感覚感情の語義には<ベクトル性>があり、感覚感情変化の経過を内包する>こと²⁶が推察できる。(“玩痛快”“吃痛快”“哭痛快”“笑痛快”“谈痛快”“说痛快”など)述語成分となる動詞はすべて継続動詞であり、社会通念として、長時間の継続によって何らかの生理現象・感情変化を生じさせたとしてもおかしくないといみなされた行為を表している。そこで、状語として“哭”と共起するにあたっては感情形容詞としての語義を表すのは自然な選択である。([痛快③]訳文参照)また“痛痛快快地”が<行為>と平行してある感情が生じるようなやり方で試行する>という意味をあらわすことも、重疊形を状語にした場合の統合意義特徴により説明できる。すなわち、両者とも仁田 1983 の副詞分類によれば、<様態の副詞>として機能しているのであり<結果の副詞>として用いられる形式ではないと解釈できる。

そこで、“很痛快地”のみが“哭哭”という述語と共起できない第一の原因は、上記(1)(2)の試行という文法的意義特徴との共起制限を生じさせているとともに、日本語の語義レベルでの結果の副詞とはまた異なった、<文法レベルでの結果>すなわち文法的意義特徴としての結果類を表しているための推定できる。

何故“很痛快地”に結果を表すという文法的意義特徴が生じるかを考察していくと、“痛快地”“痛痛快地”と異なり、“很痛快地”はく副詞“很”によって感情の確定化(変動・不安定要因の消滅)が認定されている> という統合意義を表すために、感情変動の最終段階としての結果(動詞の意義素内変化に擬するならば「異相の状態」)を表すことになる、と解釈できる。

そこで、【“很”の文法的意義特徴Ⅲ】として、以下の規定を認めることにする。

【“很”の文法的意義特徴Ⅲ】をとりたてて規定しておくことは、他の統合型の考察にも有効な判断基準を提供すると、予想できる。

【“很”の文法的意義特徴Ⅲ】

【“很”+感覚感情形容詞】の統合型において、被修飾語となる感覚感情形容詞の指示する状態(あるいは現象素)が、安定した確定状態²⁷ にあると判断する。

4-3：計量形容詞の描写形容詞形状語としての文法的意義特徴

4-3(1) “远远地” “高高地” を例として

“远远地” “高高地” の計量形容詞²⁸ “远” “高” としての意義素をまず、【表Ⅰ】のように規定しておく。

共通の意義特徴は「距離」「基点・終点」「動線」「長い」として記述する。

【表Ⅰ】

意味的事項	“远”	“高”
判断対象	ほぼ水平方向に隔たった2点間の距離(1次元)	ほぼ垂直方向に隔たった2点間の距離：①形状②起点終点
(判断対象格)	終点	①物体* ②終点
判断方法	起点から人体移動を起こし終点までの移動距離を測る	起点から視線を移動させて終点までの移動距離を測る
(判断基準)	判断(計量)スケール上の起点寄りのほかの点	判断(計量)スケール上の起点寄りのほかの点
判断結果	人体移動の感覚がより長い	視線の動線がより長い

① * 垂直方向に厚みのある物体 (判断方法も触覚を用いる)

“高”の多義構造において、より多用され、優先的に連想される基本義は、①の<触覚・視覚による形状判断>である。①が物体の形状に関する属性として規定されうるのに対し、②の語義は個々の物体の属性としては扱えない。さて、“远远地”“高高地”という統合形はともに次の共通した用法を有する。

それぞれの用法からいくつかの文法的意義特徴の存在が導かれる。

- (1) 主述統合型のなかで述語成分にはなれない、すなわち、形容詞述語成分が備えるべき文法的意義特徴を原形“远”“高”評価形容詞形“很远”“很高”が担えるにも関わらず、重畳形式では担うことができない。また、定語成分として中心語を修飾することもできない。そこで、“远远地”“高高地”という重畳形式は描写対象格として「終点」をとることができない(主語の位置に置けない)と判断できる。
- (2) 状語中心語統合型(A地V型)の状語成分、述語様態補語(V得A型)にはなることができる。状語成分・AA地(de)の構造助詞deと、様態補語成分・AA的(de)における語気助詞deとは、重複して用いることができる。すなわち、【V得AA地V~】という形式を用いることが出来る。したがって計量形容詞の重畳形につく2種類の助詞de(地・的)の文法的意義特徴は基本的に同一であり、様態補語成分AA的が単独で陳述を担える述部終止形であるとは認められない。

[远远地①] 一开始她都不让我们见那个人。

小沉一来，她领着他躲得远远地说话。(王朔《空中小姐》)

[遠い①] はじめの頃彼女は私達をその人に会わそうとしなかった。チンさんが来ると、彼女はすぐに彼をわきへ引っ張って行ってから話をしていた。

cf: 状語成分として「人目を避けた」その位置が遠く離れていることを詳述し、そのA地V型の統合意義は、遠くで話を交わしていることを叙述している。

そこで、<計量形容詞重畳形“远远”“高高”のあとに付くde>についての文法的意義特徴を見出すために、まず、2種類の文法成分の統合意義について解釈してみる。すると、状語成分としての重畳形は、その文の叙述時点での<出来事としての動作行為の過程>に対する描きこみを行う詳述の営みをおこない、様態補語成分としての重畳形は、<事柄としての動作行為のあるパターン>の描写を行う叙述の営み(様態補語成分)を行う形式であると解釈できる。(出来事は、事柄が叙述時点(地

点)を背景として情報にとりこんで形成された概念であり、より個別的・具体的情報を表す。²⁹⁾この両者に共通し、かつ(1)で検討した意義素の格要求に関する制限と、次項(3)で検討する語義的意義特徴とに抵触しない、文法的意義特徴を探さねばならない。本稿では、上記の3条件をみたすものとして、次の文法的意義特徴を仮定する。

【計量形容詞重畳形(“远远”“高高”)に後続する助詞deの文法的意義特徴】

(距離をはかる動線の長さが)述部の背景となる叙述時点(地点)において、一時的に示されている数値であることを表示する。

(3)“远远地”が状語成分として用いられた文脈で、その“远远地”を“很远”におきかえられる例は管見のかぎりでは見つからなかった。一方、“高高地”が“很高地”におきかえられる用例は、状語と統合される述語成分内の賓語Nが“很高的N”という統合を可能として、＜属性としてある物体のなかの高いポジションに存在している(物体の一部である)ことを示している＞という統合必須文脈意義が必要である。すなわち、“高”の意義素で多義構造を生じる2種類の判断対象格のうち、「垂直方向に厚みのある物体」をとっている必要がある。そこで、“远远地”を“很远”におきかえられない原因は、“远”の意義素が＜物体の属性＞を表すことができず、いつでも、基点の取り方にしたがってポジションの判断基準そのものが変化するという＜一時的な空間ポジション＞しか表さないことにありと推定できる。

[高高地①] 小猴高高地坐在树枝上。 →→※ 小猴在树枝上高高地坐着／坐了／坐下了
→→? 小猴很高地坐在树枝上。 →→※ 小猴在树枝上很高地坐着／坐了／坐下了
→→ 小猴坐在很高的树枝上。

[高い①] 猿が高い枝の上に座っている(→→ 座っていた)。

Cf: 重畳形を用いると、高い枝まで登っていく過程を思い描かせる描写と
感じられるという。評価形容詞形を用いると完全な状態描写となる。
すなわち、状語成分が重畳形でも評価形容詞形でも使える文脈では、重畳形の意味は「動作行為の過程での＜状態達成への意図＞」に焦点があてられる。
また、叙述内容は現実化した事実叙述に限られる。³⁰⁾

以上、3項目の検討を通して、次のような総論がたてられると考えられる。

計量形容詞の、状語成分そのものの文法的特徴として<述語のになう叙述時点(地点)における状況を、背景として有しているところの状態・過程>という文法的意義特徴が存在している。すなわち、状語成分の位置で副詞“很”が用いられて、判断スケールが固定されたとしても、その判断は述語成分の述語類型である判定(超時的な論理叙述)とは異なり、述語の背景となる叙述時点(地点)における判断として<時空からの制限>を受けている。

4-3 (2) “远远地”が表す表現者の視点と投射マッピング³¹

次に、状語成分としての“远远地”が、その組みあわさる述語成分の語義的意義特徴との呼応によって異なる2種類の語義【移動語義】と【定点語義】を表す多義構造を、意義素内の意味的事項での規定と対照しつつ検討していく。

さらに、その検討を通して、<述語になれない形容詞状語形式>に特有の詳述に関する文法的意義特徴がどう記述されるべきかについて、<状況を俯瞰する表現者>が描写者となった、その視点を、認知言語学におけるメンタルスペース間の<マッピング>の観点から説明する。

§1:【移動語義:起点からの移動距離が伸びてくる:伸びていく】

[远远地②] “我们这儿就没有姓乔的。”女售货员远远地扔过一句。

(王朔《玩的就是心跳》)

[遠くから①] 「私達のところには喬って人はいないわよ。」女性店員が遠くから声をかけてきた。【“扔过”は音声が話し手の方へ向かう移動】

[远远地③] 要不，脑门上贴张八分邮票远远地寄到黑龙江去。

(王朔《玩的就是心跳》)

[遠く①] でなかったら、額に8円切手を貼って遠く黒龍江へ送るよ。

【“寄黑龙江去”は郵便物が終点=黒龍江へ接近していく移動】

“扔”も“寄”も、本稿の動詞分類では<18:物体移動動詞>であり、両者の意

義素内構造の違いは、流相の「移動の一定方向性」の他に、異相の開始事点としての「移動の終点」を設定するかしないかにある。前者は異相を設定せず、いつまでも流相の過程にある無限動詞であり、後者は異相の開始事点を有する有限動詞と考えられる。

[远远地②] の述語動詞“扔”はV得A型“扔得远远的”によって、投げられた物体の移動距離が長くなることを表す。“扔”の意義素内にはくめざすべき終点が設定されていないため、「投げるという行為のパターンの一つ」として移動距離が長いことを表現できる、と解釈できる。“扔过一句”の統合意義も、「“一句”が聞き手の居る方向へ飛んで近づいてくる様子」を表す。これは、具体的動作が一連のプロセスとして生じさせる＜動作主が投げること・対象の移動(終点の規定なし)＞という空間スペースを起点現象素粋として、目的現象素粋としての聴覚のスペース＜人が発声すること・音声の伝播(終点の規定なし)＞へと語義レベルで投射マッピングした叙述と解釈できる。辞書にも採録されない統合であるのに、何の違和感もなく使えるこの(投射マッピングによって生み出された)隠喩は、それぞれのスペースを見つめる概念化者が、表現者ではなく、第一人称者でさえなく(なぜならば、統合型も同一の述賓構造を使用できる)、意義素内の意味的事項の関連性を認識する不定人称者であることを示唆していると考えられる。³²

一方、[远远地③]の述語動詞“寄”は意義素内に終点を含むため、終点のない距離を表すV得远远(很远)的の統合意義特徴とは共起できない。意義素内の終点に対して「起点との長い距離を隔てて固定されている＝“很远”(“远”ではない)」という属性を付与した統合“寄到很远的地方”の統合意義に拠って移動距離を表す。

これらの統合意義と、状語成分としての“远远地”が表す移動語義との差異は“扔”“寄”という【行為が行われる叙述時点において、物体の移動距離が長い】ことを、＜状況を俯瞰する表現者の視点＞にたって描きこむ(詳述する)点にある。第一人称者が述語の要求する格を補填するために言語形式を連結していく叙述の営みでは、“远”には「判断対象:終点」が主語の位置に置かれ、また「V得:ある移動の典型」が様態補語への擬似格(描写対象)として述語位置に置かれる。またVA型では動詞Vの相プロセスの中に長い移動距離があるという動詞の語義との文法的共起条件によって統合される。しかしCACV型での状語としての詳述の営みが表す「“远远的(地)”であると認識する必要条件である＜起点から終点までの距離の長いこと＞」とは、個々の言語形式の語義に拠って表されてはいない。その物体移動の起点は【動作主が動作を行う地

点】であり、表現者の視点によって認知される。また、移動の方向性にある終点(意義素内意味的事項として規定があり、かつ格である)は同一文内にある言語形式によって指示されるべきであるが、“远”の終点は叙述された言語形式によって指示されることはなく、やはり【その物体の移動の終点】として表現者によって認知されたと解釈せねばならない。

§ 2:【定点語義:動作主の居る地点から知覚対象のある地点まで隔たっている】

[远远地④] 无论何时, 只要远远地发现了戴晓蕾, 康伟业撒腿就往家里跑。

(池莉《来来往往》)

[遠くて①] どんな時であろうと、遠くでタイシャオレイの姿を見つけさえしたら、カンウェイイェはサット家の中に駆け込んだ。

[远远地⑤] 颂莲披衣出来, 站在门廊上远远地看着那里的梅珊。

(苏童《妻妾成群》)

[遠くから②] ソンレンは服を羽織って出てくると、廊下にたって遠くからそこ(庭)にいるメイサンを見ていた。

[远远地⑥] 他有意示威似地指着一本打开的字典远远地指给老师看。

(王朔《我是你爸爸》)

[遠くから③] 彼はわざともったいぶるように、開いた字典を指差しながら、遠くから教師にそれを見るように指示した。

[远远地④][远远地⑤][远远地⑥]では、移動する物体は何も存在しないにも関わらず“远远地”が用いられている。“发现”も“看”も、本稿の動詞分類では視覚を通して精神対象を感受する<4:知覚動詞>であり、“指”は情報の移動(受け渡し)を伴う行為として<5:言語行為動詞Ⅰ>の下位に属する。その意義素内の相プロセスを観察してみると、3つの動詞すべてに、その「知覚・情報を獲得するため、視線の移動を生じる」という共通の語義的意義特徴を見出すことができる。

語義レベルでの移動とは何か、を考察してみると、次のようなマッピング方式が認められる。原形“远”の判断対象は人が歩行して計るほど長い距離であるが、“远远地”においては距離の概念が、人体の移動という空間スペースから、情報獲得のための視線の移動という知覚・思考スペースへと個々の要素ごとに対応させられている(マッピングされてい

る)。このマッピングにおける個々の要素ごとの対応とは、概念化者によって生成された空間スペース「起点→移動物体(不定人称者)→終点」の流れを概念化者である表現者が「知覚者→(知覚者の)視線→知覚対象」の流れに対応させた結果であると解釈したい。このマッピングを【視線移動マッピング】と名づけておく。

視線移動マッピングは大変強固な対応作用を発揮し、起点を表す動詞と視線移動を表す動詞とを分けて用いることができる。その場合、起点が定点として明らかに認知される。
[远远地⑦] 白丽远远地在长桌另一头坐下, 遥望着这两个……警察。

(王朔《人莫豫毒》)

[遠く②] パイリは遠くテーブルの片側に座って、その二人の警察官を眺めていた。

[远远地④][远远地⑤][远远地⑥]では知覚者の居る位置について、言語形式によって明記されていないが、[远远地⑦]では知覚者の居る位置を述べる述語“在长桌另一头坐下”に対して状語“远远地”を統合させている。しかし、その距離がどの起点と終点を結ぶものであるかについては、後句“遥望着这两 ”で明らかにされるのである。この単文の前句では、状語“远远地”の存在によって、叙述の営みがく陳述を担える叙述完成度>に達していない。語義レベルで補填されねばならない情報すなわち移動の終点が欠けているからである。そして、語義レベルでのマッピング対応関係は同一単文内で表現しつくされねばならないことが推定できる。

以上2種類の“远远地”の語義を検討するにあたり、詳述の営みと叙述の営みとの示差的特徴として繰り返し指摘したく状況を俯瞰する表現者の視点>について、ここで補記しておくことがある。話し手とは聞き手と対になる伝達上のパロールレベルでの人格であり、第一人称者(文中の「わたし」とは相手と対になるコミュニケーションのためのラングレベルでの人格である。このような、文の意味構造が段階をもつという文法観は、従来の国語学陳述論をはじめ、いくつもの先行研究が採用してきている。³³ 特に服部 1957³⁴ では、認知言語学の隆盛よりも遠く早くに、概念化者に相当する「言語活動を行う人格のあり方」について、「発話者」「表現者」(文の単位を完成する人格として規定されている:しかし、本稿では同一話題への叙述内容の完成者と変更を加えた)「第一人称者」「不定人称者」という段階差を認めようという問題提議がされている。服部による自説の展開が行われていないため等閑視されてきているが、再評価されてよい慧眼であろう。

本稿が詳述の営みとして記述する文法的意義特徴は、＜聞き手が話し手の発した文の意味を理解するという伝達の成立過程は、聞き手が話し手の視点を正確に捉える、または追体験すること＞という観点にたつて、表現者から話し手へ重ねられて移動していく視点(対象を完成する人格とその対象を認知する人格)を強調している点に特徴がある。

表現者は第一人称者が述べた叙述内容に描きこみの詳述を加えるほか、多くの発声的特徴を音韻・イントネーションの型に加える。話し手はその発話場面に生じた一時的情報を叙述内容のなかへ埋め込んだりして、さらに、その時その場限りの＜パロールとしての文の意味＞を指示していく。その話し手の伝達の営みにも、やはり一定の型が存在し、その伝達の型をさまざまな認知の方式の差異として説明していこうとするのが、本稿のたつ文法観である。

5 おわりに

当初、本稿では、検索資料Ⅴを中心資料とした、「動詞・述語成分からの検討」という項目がつけられる予定であった。しかしながら、内省報告のユレの確定と、被験者間の相互確認に予想以上に時間がかかり、稿を改めねばならなくなった。文章構成上、偏頗な論文になってしまったが、後日報告させていただきたい。

-
- 1 大滝幸子 2000 「動詞と形容詞とが構成する文法構造— 中国語 3 種類と日本語 1 種類の対照研究」金沢大学中国語学中国文学教室紀要第 4 輯 pp1-25
 - 2 大滝幸子 2001 「中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その 2）— 動詞と形容詞“清楚”の結びつきを通して—」東洋文化研究所紀要第 140 冊 pp91-146
 - 3 拙稿 2001 ?? 说话说清楚了。（単句文として言い切りにくい）

说这句话清楚了（賓語の特定化・現実の叙述）単句文として言い切れる。

- 4 拙稿 2001 : 他问这件事问清楚了。

“清楚”の詳述の対象として、主語（動作主格＝彼がよく理解できた）賓語（思考受け手格＝内容がはっきり問いただされた）述語（相プロセス・一定方向の平行する過程＝質問のしかたが筋道だってきた）の 3 種類がある。どれを選択するかは文脈意義によって決定される。

- 5 従来の国語学の術語では、「単文」「複文」にあたる。本稿では、“文”という名称を、必ず「陳述が一つ存在するごとに、存在が認められる形式」であり、最大複合統合型として位置付ける。したがって、複文のなかの主節（主文）、従属節（従属文）は、単独では陳述を持ち得ない「句」（複合統合型ばかりでなく、一つの統合型や単語でも成立）と見なして、名称を「主句」「従属句」と変更して用いる。
- 6 テキストの定義については、談話分析の方法の違いによって異なる作業仮設が提案されてきている。本稿で「話題」を取りあげるのは、文単位の意味・文法分析と連続したテキスト分析を試みるためである。
- 7 共同叙述は複数の人格による共同作業であるため、その考察にあたっては、従来の会話分析、テキスト分析およびディスコース分析の分野で指摘されてきた各種のルールを視野にいれる必要がある。
- 8 尾上圭介 1999： 落語の＜下げ＞の談話論的構造 『日本語学』vol. 18, 10
場の＜共感構造＞の形成という概念を、文単位の＜陳述＞に擬している。
- 9 チョムスキー小事典 1986 大修館書店 p 29
- 10 金沢大学文学部中国語学・中国文学コース3年生の林智くん作成の製品である。
- 11 述語が求める格補填語には、(1)意義素内の格が要求する事物(主語・賓語の位置で補填される第一次格)と、(2)述語が表す、または担う状況と同一の状況内(同一の叙述時点・叙述地点)で存在する、社会通念上関連が深いとみなされている事物(介詞の賓語の位置で補填される第二次格)との区別をつけねばならない。また、分析対象とする言語資料が、書記された資料である場合と発話資料である場合とでは、格補填語の指示対象がその内容とする情報量が異なっている。前者では、文脈意義を含んだ統合意義すなわち現象素からの情報であり、後者ではそれに、発話場面の伝達要素と場面指示からの情報が加わる。
- 12 これは話し手の叙述内容に対する立場表明に呼応する表現者の視点と設定できる。もともと、詳述の文法的位置(形式的には主部と述部の中間)に置かれる形式は、文の成立、すなわち陳述との関係に基づく、大きく3種類に分けられる。
 - (1) 第一人称者の判断である「否定」「可能性」「推定」などを表示し、定語内や句の内部に収まることができ、必ずしも陳述と結びつかない形式
 - (2) 話し手の判断を指示し、必ず文を言い切ることを要求する陳述を担う形式
 - (3) 必ずしも陳述と結びつかない形式でありながら、文の発話時点・発話時点に限っての表現者の判断をあらわす、(1)(2)の中間形式ここでの「表現者の視点にたった評価」とは、この(3)中間形式に帰属する。
- 13 大滝幸子1999「中国語動詞と形容詞“清楚”とが構成する統合型の文法的意義特徴(Ⅰ)」金沢大学中国語学中国文学教室紀要第2輯

- 14 渡辺実 1974 『国語文法論』笠間書房:「誘導の職能」pp 129-146
- 15 原由紀子 1989「程度副詞“很”と状語の関係について」姫路独協大学外国語学部紀要第2号 :ただし、状語のなかの“很”と時間副詞“在”とに共起制限が生じる原因については、インフォーマント調査の結果が原論文とでは異なるために、本稿では異なった解釈をたてる(“痛快”の用例解釈参照)。主な原因は被験者の年代差にあると予想される。
- 16 大滝幸子 1996「状語中心語統合型の統合意義特徴」東洋文化研究所紀要第129冊
- 17 大滝幸子 1992「人間を形容する形容詞の意義素記述」における日中対照研究
明海大学外国語学部論集第5集 :形容詞が主語の位置で補填する格として、
「判断対象格」「描写対象格」「経験者格」「原因格」の4格をたてた。
- 18 拙稿 2001, p135 (初出:大滝幸子 1996)
- 19 感覚形容詞と感情形容詞の違いを規定する文法形式の一つは<让人~>である。
感覚形容詞は必ず“觉得:感到”を介して挿入される(“让人觉得冷”など)が、
感情形容詞は単独でも挿入できる。“痛快”は“这件事让人感到痛快”と“这件事
让人痛快”と、双方の挿入形式がとれる。
- 20 拙稿 2001p99 では、【状況意義特徴】として、「主題位置への賓語の前方移動と格に
ついて」を規定した。同様に、この述語としての“得”を「述部の前方移動後の痕跡」として
解釈することも可能である。しかし、述部の中で状語がいっしょに前方移動するケースと
状語が残るケースとを区別する文法的意義特徴が、いまだ明確にされていないため、本
稿では「代用形式」として扱うにとどめ、意義のレベルでの考察対象にとどめる。
- 21 複数の現象素が連結して現象素枠を構成していくという、文の叙述内容の構成に
対する意味論的解釈は、認知言語学(特にメンタルスペース理論)で提唱されてい
る「融合(Blending)」に類似する視点にたつ。
参考文献:ジル・フォコニエ 2000『思考と言語におけるマッピング』岩波書店
Mappings in Thought and Language
Cambridge University Press, 1997 第6章融合:統合の原則
- 22 中国語の語彙体系内では可能不可能の判断方法を現す形式として、能願動詞の
“会”“可能”“可以”、さらにまた可能補語を用いた表現など、多くの区別が認
められる。個々の能願動詞が「判断対象が判断基準の要求する格をみたせるかどう
か」を判断する視点は、“能”の場合、大雑把に記述するならば、「判断対象(主
部)の現象素(枠)内部の側に、述部が指示する現象素の成立要件として関連付け
られる(融合できると認知しうる)条件が含まれているかどうか」にある。
- 23 Chomsky 1981 *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris
生成文法のGB理論では、当初「S→ NP INFL(時制と一致要素と法助動詞の所在)
VP」として、NPとVPの中間位置に主語、述語と一致する必要のある要素の存在を記述

した。中国語の能願動詞と英語の法助動詞とは文法的機能が異なる。したがって、本稿ではINFLとは別の観点から、述部の先頭に、状語(「詳述の営みの範疇」)とは異なり「叙述の営みの範疇」に属する論理判断(主述関係の成立不成立を判断する)を行う文法的位置があるものとして扱う。この位置において、肯定否定をはじめ、述部が主部と統合するさいの成立要件(当該主述統合型の統合意義特徴が含有すべき文法的意義特徴)が決定されるものと仮定する。いわゆる助動詞や中間位置の扱いについて、他の文法概念との混同を避けるために注記しておく。

- 24 大滝幸子 1996 「時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析」金沢大学中国語学中国文学研究室紀要第1輯 p21 “很”の文法的意義特徴ⅠⅡ

- 25 仁田義男 1983 「結果の副詞とその周辺—語彙論的統語論の姿勢から」

『副用言の研究』明治書院

奥田敬一郎 1983 「変化動詞における形容詞移動」『副用言の研究』明治書院

奥田 1983 では、変化動詞文の型(<事物><始発><結果>)をつくる4種類の変化動詞「一般変化動詞」「消滅動詞」「発生動詞」「生産動詞」のうち、発生動詞・生産動詞には<結果の副詞>が組み合わさるだけでなく、結果を表す形容詞が連体修飾語として名詞につくことが指摘されている。中国語では語彙グループ(生産動詞：生産物格をとる)の中で、さらにA地V~N型およびVA了N型とV~A的N型での統合意義特徴の差異(拙稿1996：2000)が共起制限を決定する。

- 26 大滝幸子 1995 「述語補語統合型の統合意義特徴」東洋文化研究所紀要第128冊

- 27 確定状態の反義語は「未確定状態」：特定不特定(伝達レベルでの情報として、話し手・聞き手の共通旧情報であるかどうか)と対比した場合、「叙述レベルでの述語類「状態」の一種類として、変化が消滅しているかどうか」という示差的特徴がある。また、指定無指定(言語形式の指示機能として、発話場面・文脈のなかで個としての現象素が指し示されているかどうか)定不定(言語形式の表示機能として、意義素内意義特徴のほかに使用にあたっての場面的・文脈的意義をも表しうるかどうか：概念のみの表示かどうか)と対比した場合にも、相互に示差的特徴がある。

- 28 計量形容詞の定義と成員は、拙稿1996(注24)に準拠する。

- 29 筆者の論考で用いてきた叙述に関する概念体系は以下のとおりである。

述語の類型として：状態・過程・事柄 (要求する格との語義的關係)

叙述の類型として：判定・変化・出来事(状況内での情報の性質)

叙述内容の基本類型として：論理叙述・事実叙述

参考文献 中右実 1994 『認知意味論の原理』大修館書店

益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版

1991『モダリティの文法』くろしお出版

- 30 この「ほぼ同一の現象素枠を指示する」3種類の叙述内容がどう異なっているかを正確に記述するためには、テキスト分析の手法による考察が必要である。

- 31 ジル・フォコニエ 2000 (注 21 参照)

- 32 Norvig, Peter, & Lakoff 1987: "Taking: A Study in Lexical Network Theory" BLS 13: 195-206

多義的な語彙項目 "Take" の語義がさまざまなネットワークを構成することを示した、認知言語学の古典的論文のなかでは、<メタファー: 知覚することは受け取ること>が7番目の多義を解析する図式として挙げられている。これは、現在の投射マッピングの原型を示しているといえよう。

河上誓作編著 1996: 『認知言語学の基礎』研究社出版 pp73-82

- 33 南不二男 1993『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

述部の構造が階層を成すという文法観について: 金田一春彦、渡辺実、芳賀やすし、服部四郎、林四郎の諸説を自説と対照して、概説してある。述部の要素と述部以外の諸成分との呼応関係について: 阪倉篤義、北原保雄、および実証研究の佐伯哲夫、宮島達夫の諸説を自説と対照している。中国語研究の分野では、いまだこれらの研究と同等の質量を備えた階層文法論はあらわれていない。言語形式の形態変化が日本語に比べていちだんと少ない中国語においては、文法成分間の呼応関係を考察するにあたり、形態よりも語義のレベルから解析する手法がより重要であるにも関わらず、意味を扱う体系的な視点とそれに基づいたルールが見出されにくかったためであろう。

- 34 服部四郎 1957「ソスユールのlangue」と言語過程説『言語研究』32号